アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第6号　2008年3月　73～86頁

内村鑑三の愛国心

菊川　美代子

序文

本研究は、明治期に生きたキリスト者である内村鑑三が、日本に対して抱いていた愛国心、また、彼の考えていた愛の概念を明らかにし、愛国心と非戦論の関係とを論じる。そして、それを通して、内村が同時代の国家主義に呑まれずに非戦論を唱えることができた理由の一端を、愛国心の観点から探ることを目的とする。

交戦国の国民が国家主義的愛国心に呑まれ、その大多数が戦争礼賛への道を歩むというパターンは、歴史の中にしばしば現れ、現代においても今なお克服されてはいない。明治期から昭和期の日本においても、日清・日露戦争、そして第二次世界大戦と、同様の事例が現れた。しかし、日清戦争と日露戦争時に生きた内村は、その当時一般的であった偏狭な愛国心に呑まれることなく非戦を唱えた。内村の平和思想は、今なお戦争の絶えない現代において、我々に平和についての再考を促す材料を与えるものであり、こうした点から、内村が平和思想を貫くことができた要因を明らかにすることは適切であると思われる。

本論文では次の順序により、議論を進める。第一章で、キリスト教入信以来、内村が終生奉じ続けた「二つのJ」――Japanと Jesusについて考察する。また、この言葉からも明らかであるように、内村は強い愛国心の持ち主であった。しかし、内村は、日本に対する愛、つまり愛国心を「虚偽の愛国」と「真正の愛国」の二つに区分していた。そのため、第二章では、内村の考える「虚偽の愛国」と「真正の愛国」の概念について検討する。この場合、愛国心というのは、自明のことであるが、国に対して抱く「愛」であり、内村の「愛」の概念を考察することで、内村の愛国心について、より詳細に分析できると思われる。そこで、第三章では、内村の「愛」の概念を取り扱う。内村は、愛と愛国心の双方においてイエスをその模範とし、そのどちらにおいてもイエスの「忠実なる弟子」たろうとして、自身の考えるイエスの愛と愛国心を実行した。そのため、ここに、内村が非戦論を唱え得た理由の一端があると考えられる。また、国家が戦争を推進している状態においては、非戦論を唱えることは、国家に対して抵抗するということである。したがって、第四章では、内村の愛国心と国家への抵抗権について考察する。そして、最後に以上の議論を通して、内村が国家主義に呑まれずに非戦論を唱え得た理由を、愛国心の観点から論じたい。

1.「二つのJ」

内村は、Japan と Jesus を「二つの J」として、キリスト教に入信した札幌農学校時代から最期の時まで愛し続けた。「二つの J」について、『聖書之研究』に 1926 年 1 月 10 日に掲載した「私の愛国心に就て」という論文で内村は次のように述べている。

> 私は青年時代に於て常に私の外国の友人に告げて曰(い)うた、私に愛する二個のJ(ジエー)がある、其一はイエス（Jesus）であつて、其他の者は日本（Japan）であると。イエスと日本とを較(くら)べて見て、私は熟(いづれ)をより多く愛するか、私には解らない。其内の一を欠けば私には生きている甲斐がなくなる。私の一生は二者に仕へんとの熱心に励されて今日に至つた者である。私は何故に然るかを知らない。日本は決してイエスが私を愛して呉(く)れたやうに愛して呉れなかつた。それに係(かか)はらず私は今尚(なお)日本を愛する。止(や)むに止まれぬ愛とは此愛であらう。[1]

このように、両者は等しく愛するべきものであると内村は述べる。また、「イエスと日本は同一のもの」であると次のように主張する。

> イエスは私共の未来の生命の在る所でありまして、日本国は私共の現在の生命の在る所であります、爾(そ)うして神を信ずる者に取ては未来も現在も同一でありまする故に私共に取てはイエスと日本国とは同一のものであります、即ち私共の信仰は国のためでありまして、私共の愛国心はキリストのためであります、私共はキリストを離れて真心を以て国を愛することが出来ないやうに、亦(また)国を離れて熱心にキリストを愛することは出来ません、・・・・・・[2]（「失望と希望」）（1903/2/10）

内村にとって、キリストと愛国心は不可分のものであることはこれらの引用から明らかである。[3]

また、当時の愛国主義者の中には、日本をアジアおよび世界の中心と見なそうとする、ある種の日本至上主義の立場を取る者が少なくなかったが、内村はそのような立場と一線を画した。世界とはパズルのようなもので、すべての国はその一つ一つの異なった形のピースであり、一つで

＜注＞原文には複数種類の傍点が付されていたため、原文に忠実に引用することを旨としたが、傍点は一種類に統一した。また、引用部分の傍点が付されている箇所は、原文に付されていた箇所と全て一致している。

(1) 『内村鑑三全集』29、岩波書店、1983 年、351 頁。（以下、『全集』）

(2) 『全集』11、49 頁。

(3) キリスト教に限らず、一神教は思想を統一する媒体として有用であると内村が考えていたことは興味深い。「・・・・・・国も君も、親も兄弟も、名誉も財産も、将(ま)た吾人の生命其物も、総て独一無二の神の為めに愛すべきものと成て、始めて吾人の思想は統一せらるゝのである、・・・・・・一つの神を認めて縦令(たとえ)それは完全なる神にはあらざるにもせよ、夫れが為めに吾人の目的が一つとなって随つて吾人の熱心が非常に其度を高むるに至る事は疑ふべからざる事実である。」（『全集』7、352 頁。）

も欠けては世界は完成しないと内村は考えていたのである。[4] この考えは、すべての国を日本と同じ形のピースに変えようとするような国家主義とは相容れないものであり、このような国家観を持っていたからこそ、内村は当時の一般的な国家主義に呑みこまれなかったといえよう。そして、そのような国家観は、キリストと離れることのできない愛国心から生まれてきたのである。では、そのキリストから引き離すことの出来ない愛国心とはどのようなものであったのだろうか。

2.「虚偽の愛国」と「真正の愛国」

(1)「虚偽の愛国」

内村は、愛国心には「虚偽(うそ)の愛国」[5] と「真正(ほんとう)の愛国」[6] の二種類があると、キリスト教に入信してから一貫して主張している。「虚偽の愛国」とは「国を誇り、敵を憎み、国家のためとならば正義も人道も措(おい)て問は」[7] ない、「私欲を国家に移(うつ)した者に過ぎない、……自己中心の一種」[8] に過ぎないものであるとし、「基督教は斯(か)かる愛国心を罪悪の中に算(かぞ)ふるに躊躇(ちうちよ)しない」[9] と断罪する。しかし、内村自身もかつては「虚偽の愛国」心の持ち主であった。そのことを1893年11月下旬頃に執筆したと見られている著書『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で振り返っており、さらに、キリスト教入信によって自分の愛国心にどのような変化が臨んだのか、ということを以下のように述べている。

> 余の生国についての余の考は、余がそこに留まっていた間はきわめて一面的であった。まだ異教徒のうちは、余の国は余には宇宙の中心、世界の羨望(せんぼう)の的(まと)であった。……しかし余が『回心』したとき、いかに正反対になったことよ！……まもなく一つの考が余の心をとらえた、余の国は実に『無用の長物』であると。それを善くするために他の国々からの宣教師を必要とする異教国であった。天の神はそれについてけっして多くを考えたまわなかった、神はかくも多年それを全く悪魔の手の中にゆだねたもうたのである。……もし余の国が存在から拭(ぬぐ)い去られても世界はすこしも悪くはならないであろうと、余はほんとうに信じた。[10]

(4) 次の文章からその考えを読み取ることができる。「……最善の、つまり、全く完璧の国というものは世界に存在しない。……われわれは、各国民がその最善なるものを捧げ合うことによって世界は完全になると信ずる。……日本なき世界は不完全な世界である、……また、世界を日本のものにしようとする考えは、……愚劣である。それは耐えられない世界である――完全に日本化された……世界などというのは。」(『英文論説』下、287-288頁。)

(5) 『全集』12、259頁。

(6) 同上、259頁。

(7) 『全集』17、306-307頁。

(8) 同上、307頁。

(9) 同上、307頁。

(10) 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』、鈴木俊郎訳、岩波書店、2006年第70版、126頁。

内村の愛国心の内実は、基本は愛国に貫かれつつも、かなりの揺らぎが見られる。まず、キリスト教入信以前は「虚偽の愛国」心を持っており、日本中心の世界観を持っていた。次にキリスト教に入信し、日本は他のキリスト教国からの宣教師を必要とする異教国であり、この世界に何ら貢献できることのない不必要な存在であると考えるようになり、「虚偽の愛国」心は薄れたが、同時に愛国心自体も冷めた。しかし、アメリカ留学中の 1885 年にエレミヤ書を読み、愛国心が再び高揚し、「真正の愛国」心を持つようになった。その際に、「いまや国を愛する愛は天国を愛する愛のために犠牲にせらるべきであった、国を愛する愛がその最真最善の意味にて余に回復されるがために。」(11) と、「虚偽の愛国」心を完全に脱したかのような言葉を述べているが、1893 年 2 月 25 日に発行された『基督信徒の慰』の「第二章　国人に捨てられし時」において、不敬事件以前の、国賊とされるまでの自分は、「日本狂と称せられて却て大に喜悦」(12) していたと告白しており、この時点では「真正の愛国」心を獲得したとはいえ、「虚偽の愛国」心から脱却しきれていない。「真正の愛国」心を完全に獲得したのは、不敬事件によって、国内に枕する所がなくなったほどの四面楚歌の状況に追い込まれた時である。内村は、国――地のもの――から捨てられるという暗黒の中に入ることで、神の国――天のもの――に入り、真に「世界人（Weltmann）」(13) となり、「真正の愛国」心を完全に獲得したのである。

「真正の愛国」を完全に獲得した内村は、自身もかつて持っていた、この「虚偽の愛国」心は日本人の一種の宗教であると主張していく。

> われわれはしばしば、愛国というのがわれわれにとっては一種の宗教であり、無限の迷信の根源になっているという点が、わが国民性の欠点であり、それを多くの人々とともにどうしようもなく共有しているのではないだろうか、と思うことがある。わが国が将来はどうなっていくのかということに関して冷静で哲学的な考察が行われれば、わが国民性の多くの異常な欠陥を癒やすことになるだろう。(14)（「覚書きと短評―伊藤侯の教育観、その他」Notes and Comments. Marquis Ito on Education, etc.）（1898/2/20）
>
> 支那的思想を以て養はれ来つた日本人に取ては世に国ほど大切なる者はない、愛国心は彼等の宗教であつて、彼等の道徳も哲学も皆な国威宣揚の為めに用ゐられる、彼らに取ては国さへ起ればそれで人生の最大目的は達せられたのである、英雄とは国威を海外に揚げし者の名称であつて、国を富まし兵を強ふして万国を足下に蹂（ふ）み附けんとする事が今日でも日本人の唯一の欲望であるやうに見える。(15)（「興国史談」）（1900/1/25）

(11)　内村『余は如何にして基督信徒となりし乎』、140-141 頁。
(12)　『全集』2、18 頁。
(13)　同上、20 頁。
(14)　『内村鑑三英文論説翻訳篇』下、道家弘一郎訳、岩波書店、1985 年、39 頁。（以下、『英文論説』下）
(15)　『全集』7、325-326 頁。

このように、内村は「虚偽の愛国」を非難し、愛国心よりも大切なものがあると訴える。また、この文脈での「宗教」としての愛国心は、神道や仏教などのいわゆる「宗教」と同列に扱われているのではない。宗教が国家によって政治的、社会的に道具として利用されていることを見抜いていた内村は、日本人は、どの宗教に属していても、その宗教自体が国家に利用されてしまっているために、崇拝の対象が最終的に国家に帰結すると考えた。そのため、このように、日本人の宗教は愛国心であると述べたのではないだろうか。(16) 内村は「興国史談」の文章を以下のように続ける。

> 勿論国は非常に大切なものであるに相違ない、然し最も大切なものではない、世には国よりも大切なものがある、それは即ち正義である、真理である、人は身を殺しても為[な]すべきものであるが如く、正義は国の存在を犠牲に供しても貫徹すべきものである、国家存在の理由も単に此一事に止まるのである、・・・・・・(17)（「興国史談」）（1900/1/25）

内村は、国は大切なものであるが、最も大切なものは正義と真理であり、正義と真理に立脚しない国は滅びると言う。(18) したがって、国が正義と真理に立脚することを助けることこそが、「真正の愛国」となる。こうして、内村は、自身の考える正義と真理を実行し、日本を救おうと考えることになる。

（２）「真正の愛国」

内村の考える正義と真理とは当時一般的であった国家主義的愛国心の考えるそれとは異なるため、何が「真正の愛国」行為であって、何が「虚偽の愛国」的行為であるかということは、大局的な視点から考えなければ分からないということを内村は繰り返し主張していく。

---

(16)　内村は、宗教は「人の心の根本に関[かか]はるもの」（『全集』27、152 頁。）であるが故に、最も大切なものだと主張した。なぜなら、文明や制度がいかに発展しても、それを用いるのは人間であるから、人間の心をその根本において清め、かつ強める必要があり、そして、その役割を果たすものが宗教だと考えていたからである。さらに、国家は人間の集合体であり、人間の根本は心であり、宗教は心の根本に関わるものであるから、内村は、人と国の如何はその宗教によるとした。次の文章を参照。「As is religion, so is man（人の如何[いかん]は其宗教に因る）であります。又 As is religion, so is country（国の如何は其宗教に因る）とも云ふ事が出来ます。」（同上、525 頁。）

(17)　同上、325-326 頁。

(18)　真理と正義が国家の上に位置することを内村は初期から主張する。「・・・・・・正義は国家より大にして、其基礎を正義の上に定むる国家のみ永久に栄えん。」（『全集』６、208 頁。）「真理は必[かならず]しも国を興すものにあらず、真理は或時は国を亡すものなり、誤謬の上に建られし国家、偽善に依て築かれし国家は真理に遭ふて破滅するものなり、真理の価値は国の興廃を以て定むべきものにあらず。」（『全集』7、441 頁。）

……何にが愛国的行為であつて、何にが非愛国的であるか、それは広き世界と長き将来との見地より見なければ分らない事である、余輩は只真理と信ずることのみを唱へて居れば、直接、間接に何時か何物かを我国の名誉の上にも貢献することが出来る。[19]（「内外見地の差違」）（1904/8/18）

我は我が愛する斯国を今日直に済ひ得ざるべし、然れども我は百年又は千年の後に之を済ふの基を置えんと欲す、我が小なる事業が救済の功を奏するまでには我国は幾回となく亡ぶる事もあらん、然れども我は永久の磐の上に築て時の変遷を懼れざるべし、我は我国を世々の磐なる我神に委せん、世の政治家の如くにあらずして、預言者の如くに、使徒の如くに、大詩人の如くに、大哲学者の如くに、永遠の真理を講じて永遠に我国を救ふの道を講ぜん。[20]（「我が愛国心」）（1908/1/10）

だが、これらの文章が意味するところは、ある時点で愛国的行為に見えているものでも、長い月日の後から見れば非愛国的行為である可能性があるという文面通りの意味だけではなく、内村が生きていた当時、一般的に行われていた「愛国的行為」は真理に沿わないものであるという非難と、自分は真理に沿った「愛国的行為」をしているという自負が込められているのである。[21]さらに、内村は、「虚偽の愛国」は「しばしば『悪漢の最後の拠り所』」[22]であり、「世の所謂る『愛国者』」[23]こそが、国を利用し、国家を欺いていることを見抜いていた。[24]

また、「虚偽の愛国」が「真正の愛国」という「名誉の段階」[25]へと引き上げられるのは、正義と真理を愛するようになった時においてであると述べる。

日本人の宗教は、仏教でもなければ神道でもない。それは愛国心そのものにほかならないのだ。……

(19)『全集』12、351 頁。

(20)『全集』15、318 頁。

(21) 1928 年 11 月 10 日に『聖書之研究』で発表した「我が奉仕の途」にその自負が表れている。「我等は如何にして国に尽し、陛下に仕へ奉らん乎、我等が陛下と国とに対し尽し得る最善の途は、一人なりとも多く、正直にして勤勉、衷に充足りて自己以外に何の求むる所なき真実の民を作るにあると信ずる。そして我等は一生を通うして此事業を続け来つた。そして我等の努力は空しからずして、隠れたる所に多少の効果を挙げ得た積りである。敢て此世の賞賛を博せんと欲するに非ず。茲に此時に際し我が奉仕の途を明かにする次第である。」（『全集』31、356 頁。）

(22)『英文論説』下、45 頁。

(23)『全集』11、51 頁。

(24) 次の文章を参照。「彼等は愛国心なきを以て我等を責む、然れども彼等は自分の利益のために常に国家を利用し、時には国家を欺きもする、博士ジョンソン曰く『愛国は悪人の最後の隠場所なり』と、又哲学者スペンサーは曰く『利己心を拡大せし者之を愛国心と云ふ』と、……」（『全集』23、250 頁。）

(25)『英文論説』上、103 頁。

しかしこの世には、人や物に対すると同じように、自分の国に対しても、偏愛といったものがある。愛国心は外のすべての愛情や愛着を排斥し、それらに取って代わるとき、害となる。そして日本的愛国心は、往々にしてこの排他的な権利を自分のものとして主張するため、道理にかなった信仰や信念とならないで、狂信や迷信となってしまう。彼等は自国のためとなると、正直という最も一般的な法を忘れることがある。

・・・・・・われわれの愛国心は、血縁関係以外の者は正義という一般的な法の枠の外にある者だとみんなが見做していた時代の、まだ粗野な形の愛国心なのである。わが国が普遍的な真理を愛するがゆえに愛されるようになった時にのみ、愛国心は名誉の段階に引き上げられる。そしてその段階では、国を愛することは世界を愛することであり、われわれは世界をより多く愛さんがためにわれわれ自身を愛するのである。[26]（「忠君愛国」Loyalty and Patriotism.）（1897/3/25）

「名誉の段階に引き上げられ」た愛国心である「真正の愛国」とは、個人は、神のために世界と人類に尽くし、世界と人類のために国に尽くすものであり[27]、先に少し述べたように、他国は同じピースの一つであるから、「他国の権利を重んじ、其発達を希望する」[28]ものであると内村は述べる。つまり、「虚偽の愛国」が「自己中心の一種」で自国のみの利益を願うのに対し、「真正の愛国」は他国の利益も願うものであるのである。したがって、「虚偽の愛国」と「真正の愛国」を分ける鍵は、自己中心であるか否かということである。

「真正の愛国」心の理想的なモデルとして、内村は旧約聖書の預言者らの愛国心とイエスの愛国心を挙げる。管見では、旧約聖書の預言者らの愛国心については 1909 年 4 月 10 日に『聖書之研究』に掲載した「モーセの五書」が、イエスの愛国心については 1910 年 8 月 10 日に『聖書之研究』に掲載した「イエスの愛国心」が初出のようである。

また、聖書に愛国心の文字が明記されていないために、当時、「基督教に愛国心なし」[29]とする、キリスト教への攻撃がしばしば行われた。これらに対して、内村は、聖書に愛国心という文字はないが、愛国的行為は非常に多くあり、イエスとその弟子達が愛国心を持っていたことは聖書に明示されていると反論する。内村が愛国的行為を述べている聖書の箇所として、旧約聖書の預言者の愛国心については出エジプト記 32 章 31-32 節を、パウロの愛国心についてはローマの信徒

(26)　同上、102-103 頁。

(27)　内村はそれを「倫理学上のコンモンセンス」であると述べる。「自己の為めにする、党派の為にする、或は自国の為めにする国家主義は甚だ下劣なる国家主義なり、人は其国の為めに尽して其本性を全うする者なるが如く、国家は人類全躰の為めに尽して其存在の目的を達するものなる、是れ倫理学上のコンモンセンスなり。」（『全集』9、175 頁。）

(28)　『全集』28、304 頁。

(29)　『全集』17、306 頁。

への手紙 9 章 2-3 節と 10 章 1 節、ヘブライ人への手紙 11 章 32 節を、そしてイエスの愛国心については、マタイによる福音書 10 章 5-7 節、同 23 章 37-39 節、ルカによる福音書 13 章 34-35 節、同 19 章 41-44 節を挙げている。その他愛国を示す箇所として、詩篇 137 篇を挙げている。

以下、旧約聖書の預言者の愛国心について議論してみよう。これについては、先に少し触れたように、アメリカ留学時代の 1885 年に、エルウィン白痴院において看護人として働いていた時に読んだエレミヤ書に強い感銘を受け、その萌芽となる考えを持ったようである。それまでの内村は、旧約聖書の預言の多くは未来談であり、神が最後に人類を救うために臨む時に、その預言との「『符合一致』をもって世界を驚かせるために人類にむかって述べられたものであるという考えをいだいていた」[30] と、『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で後に振り返っている。そのため、内村は、預言書の諸書を理解できないものとしており、聖書の解釈書は読んでいたが、聖書そのものはあまり読んでいなかったと述べている。しかし、エレミヤ書の全体を通して、ただ一つの奇跡も起こされていないことから、人間エレミヤのすべての長所と短所がそのまま内村自身に示されており、エレミヤと日本の偉人とを比較することが可能になる。この比較考量を通して、神はエレミヤに対してほど明瞭ではないにせよ、日本人に対しても語りかけていたという考えに至ったというのである。その結果、キリスト教信仰を受けて以来、冷めていた愛国心が、冷める以前より更に燃え上がり、自分に返ってきたという。それからの二年間は、内村は「聖書は預言者のほかはほとんど何も読まなかった」[31] ほど、預言書に傾倒する。そして、預言者達から「如何にして余の国を救うべきかを学んだ」[32]、つまり、真の愛国的行為を学んだのである。

イエスの愛国心について述べる際に内村が特によく言及するのはマタイによる福音書 23 章 37 節であり、この部分について、内村は、イエスはイスラエル人としてイスラエルを特愛しており、その感情が溢れ出た言葉が、この「噫エルサレムよエルサレムよ」だという解釈をしている。[33] このイエスの愛国心に対しては「国家の保存上より見て‥‥‥最優等のものであつたと言はざるを得ない」[34] と最高の評価を与えており、その愛国心について以下のように述べる。

> イエスに深き強き愛国心があつた、故に我等彼の弟子にも亦是れがなくてはならない、我等も亦我等の国を愛さなくてはならない、而かもイエスの如くに之を愛さなくてはならない、即ち其外敵よりも内敵を憎まなければならない、我等の中にも亦多く存在する学者とパリサイ人の類を彼等の面を懼(おそ)れずして、偽善者よ、蛇蝮(まむし たぐひ)の類よと呼ぶの勇気を持たなければならない、即ち剣を以てせずして国を救ふの行為に出でなければならない、斯(かく)の如く

(30) 内村『余は如何にして基督信徒となりし乎』、149 頁。
(31) 同上、150 頁。
(32) 同上、151 頁。
(33) 次の文章は、1987 年発行の新共同訳聖書の該当箇所。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前らの子を何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」
(34) 『全集』17、308 頁。

に我等の愛国心を使用して我等も亦イエスが其国人に憎まるゝに相違ない、斯(か)くなして或る種の十字架は我等の上にも亦置かるゝに相違ない、然しながら国に斯の如きの愛国者が出ずして其国は永く存(たも)つことは出来ない、我等若し誠に我等の国を愛するならば、我等は十字架に釘(っ)けらるゝもイエスの如くに我等の国を愛さなければならない。[35]（「イエスの愛国心」）（1910/8/10）

このように、キリスト者が倣うべきであるイエスの愛国心とは、「外国人の罪を責めず、自国の民の罪を責めて、其民を永久に保つた」[36] イエスに倣い、国外よりも国内に目を向け、義のために「内敵を憎」むものであった。[37] したがって、内村は、このような愛国心を持っていたからこそ、日本に対して義憤を抱き、日本に対して批判的な意見を述べることができたのではないだろうか。

ここで注意しておかなければならないのは、内村がイエスの愛国心に倣おうとして初めて、このような愛国心を抱いたというのではないということである。上述のように、内村の、イエスの愛国心についての言及は 1910 年 8 月 10 日に『聖書之研究』に掲載した「イエスの愛国心」が初出であった。つまり、これまでに見てきたように、内村は「真正の愛国」心を、それ以前にすでに持っていた。したがって、内村の主張する「イエスの愛国心」とは、自分の理想とする愛国心を投影したものであり、その理想を凝縮させたものといえるであろう。

以上、「二つの J」と、「虚偽の愛国」と「真正の愛国」の観点から内村の愛国心――日本の愛し方を考察してきた。では、内村の「愛」とは一体どのようなものであったのだろうか。内村は当時の他の愛国者と同様に日本を強く愛したが、愛についての理解が彼らと異なっており、これが内村独自の国家観にも関連していたのではないだろうか。そこで、次に内村が考えた「愛」の概念について考察する。

3．内村の「愛」の概念

内村は、愛とは無条件に何でも赦すものではなく、義を伴うものであるとしており、愛について述べる際には、必ず同時に義の重要性を説いた。そして、「義憤なき所に真理はない、然り、憤怒の伴はざる愛は偽りの愛である、……」[38]「……真の愛に怒が伴ふ、怒らざるは偽りの

(35)　同上、308-309 頁。

(36)　同上、308 頁。

(37)　次の文章も参照。「私が日本を愛する愛は普通此国に行はるゝ国を愛する愛ではない。私の愛国心は軍国主義を以て現はれない。……私は日本を正義に於て世界第一の国と成さんと欲する。『義は国を高くし、罪は民を辱かしむ』とあるが如くに、私は日本が義を以て起ち、義を以て世界を率ゐん事を欲する。如斯(かくのごとく)にして私の愛国心はイザヤ、エレミヤ、エゼキエル、イエス、パウロ、ダンテ、ミルトン等に由て養はれた愛国心である。今日の日本に有振(ありふ)れた愛国心ではないが、然し最も高い又最も強い愛国心であると思ふ。日本の為に日本を愛するに非ずして義の為に日本を愛するのである……此愛国心のみが永久に国を益し世界を益する愛国心であると信ずる。私は愛国的行為として伝道に従事する。」（『全集』29、351-352 頁。）

(38)　『全集』24、554 頁。

愛にあらざれば浅き愛である。神が屡々其民を怒り給ふは彼が深く強く彼等を愛し給ふからである。」[39] というように、愛は義を含むが故に、怒りが伴うものとするのである。

> 愛、愛と言ひて愛のみを高調して愛は冷える。愛は正義の無き所に栄えない。正義の無き愛は日光の無き湿気の如し。黴(かび)を生じて万物を腐敗せしむ。若(も)し神が愛のみであつて、同時に亦光であり義であり給はないならば、宇宙は疾(とう)に滅び失せたのである。誠に若し基督教が愛のみを説く教であるならば之に勝さりて悪しき者は又と世界に無いのである。イエス教へて曰(い)ひ給はく「汝等心の中に塩を有(も)つべし、又互に睦(むつ)み和(やは)らぐべし」と。知るべし辛(から)き正義の塩の無き所に心の和睦の無き事を。愛の甘味のみ要求せられて正義の塩の欠くる所に、愛は平和の果(み)を結ばないのである（馬可(マルコ)伝九章五十節）。[40]（「愛と義」）（1922/12/10）

このように、神は愛と同時に義でなければならないこと、すなわち、愛と義の同時性が重要であることを訴える。また、「・・・・・・愛の要素として欠くべからざる事は悪を憎み善を強く愛する事である、・・・・・・」[41] と、悪に対し憎しみを持つことが愛には「欠くべからざる事」であるとする。さらに、愛の模範として「キリストの愛」[42] を挙げ、「愛に由りて怒ることは罪ではない」[43] と述べる。

> ・・・・・・真の愛は悪に対する憎悪を充分に含むものである、仮面的の愛は悪を憎むことを知らない、けれども深く真なる愛は斯(か)くあることは出来ないのである、強く悪を憎む人ならでは強く善を愛するを得ない、キリストの愛が此種の愛なることは四福音書に明示さるゝ所である、そして凡(すべ)て彼れの忠実なる弟子はこれであつた、ダンテ、ミルトン等高貴なる精神に燃えてゐた人の詩文を見よ、いかに悪に対する激烈なる憎悪が表明されて居るか、・・・・・・かゝる有様なればこそ神に対し真理に対して熱愛を抱き、又人に対しても深き愛を抱き居たのである、これ吾人の学ぶべき事である、強き憎みを抱かずして強き愛を抱き得る筈(はず)がない、・・・・・・されば強く悪を憎めよ、然(しか)らずしては真の愛の何たるかを知り得ないと。[44]（「羅馬書の研究」）（1922/7/10）

ここから、内村は、愛国心だけではなく、その根底となる愛の概念についてもイエスを模範としていたことが分かる。そして、内村の愛とは、義と不可分であるがために、愛が強いほど義を慕う心も強くなり、義を慕う心が強くなるほど悪を憎む心も強くなるというものであったといえる。

(39)『全集』26、551 頁。
(40)『全集』27、255 頁。
(41)『全集』26、377 頁。
(42) 同上、375 頁。
(43)『全集』24、555 頁。
(44)『全集』26、375 頁。

また、内村は愛を「受動的の愛」[45]と「能動的の愛」[46]に分ける。神に対しては、神の愛を受け入れなければならない、つまり「受動的の愛」の態度を取らねばならないとする。なぜなら、神の愛を拒むのは神に対する反逆だからである。これに対し、人に対しては全体的に、愛されるのではなく愛さなければならない、つまり、「能動的の愛」を実践しなければならないとする。「能動的の愛」を振りまく元となる愛は、神から受けた愛であり、その愛を他に向かって反射するという仕方で、人を愛することを実践することができると言う。したがって、内村の愛とは自己愛ではなく、神から受けた愛を他者に分け与えるものであることが分かる。

愛と愛国心の双方においてイエスをその模範とし、そのどちらにおいてもイエスの「忠実なる弟子」たろうとした内村は、自身の考えるイエスの愛と愛国心を実行した。その結果、国外ではなく国内に目を向け、日本国内に存在する悪を発見するや、その愛ゆえに義をもってその悪を憎み、「愛なるが故に其愛を顕はさんが為に時に義の為に怒」[47]ったのではないだろうか。内村が当時一般の愛国主義者たちと一線を画し得たポイントの一つは、ここにあると考えられる。

4．愛国心と国家への抵抗権

内村と同時代の愛国主義者らは、ともに強い愛国心を持っていたが、前者は「真正の愛国」を保ち、後者は国家主義の作り出す「虚偽の愛国」に呑まれていった者が多くいた。両者のこの違いは、国家に対する姿勢から生じたのではないだろうか。

内村の国家に対する姿勢は、1921 年 2 月 10 日から 1922 年 11 月 10 日の長期間にわたって、『聖書之研究』に「東京講演」として連載した「羅馬書の研究」の「第五十三講　政府と国家に対する義務　第十三章一節―七節の研究」において述べられている。その中で、内村は「人を愛すべし、我を苦しむ人をも愛すべし、国を愛すべし、我を苦しむる国をも愛すべし・・・・・・」[48]と言い、「我を苦しむる国」、つまり、独裁や圧政を行う国であっても、その国が自分の所属する国である限り愛するべきだとする。なぜなら、いつの時代の、どのような政治体制においても、一国の秩序を維持するための権能は必要であり、また、パウロが、国民はこの権能に従って秩序を保ち、争乱を嫌う、平和を愛する忠実な民たるべきであることを勧めているからである。

内村によると、この「国権服従論」[49]はローマの信徒への手紙 12 章の「愛及び愛敵の教」[50]から派生するものであるから、いかなる人をも愛し、自分の敵をも愛するのが「基督者の道」[51]である。したがって、キリスト者は、たとえ圧政下にあり、権能を持つ権力者が自分を虐げるとしても、その権力者に従い、かつその権力者を愛する心を持つべきであるとする。そして、この

(45)　『全集』32、159 頁。
(46)　同上、159 頁。
(47)　『全集』24、555 頁。
(48)　『全集』26、401 頁。
(49)　同上、403 頁。
(50)　同上、403 頁。
(51)　同上、403 頁。

「国権服従論」の根柢にあるものは「基督的愛の大精神」[52]であり、だからこそ、これは永久に廃れることのない「誡め」[53]であり、我々もこの「誡め」に従うべきであると言う。

しかし、この「国権服従論」は、国家が行うこと全てに従い、礼賛するということではない。内村は、「斯かる場合の甚だ稀」[54]であるとするも、国家が腐敗を極めたり、圧政を行っているような「特別の場合」[55]においては、その国家に向かって、「先づ謙遜と静和を以て権能者に向つて抗議(プロテスト)すべき」[56]であり、それがキリスト者の取るべき「最上の道」[57]だと言うのである。キリスト者は平和的手段にのみ訴えるべきであり、「幾度も幾度も繰返して抗議し、其他平和を超えぬ範囲においては凡ての道を取るべきである」[58]とする。だが、その目的が達成されなくとも、武力に訴えるのではなく、あくまで平和的手段にのみ訴え、その処罰はすべて神に委ねるべきであると述べる。なぜなら、武力の行使は憎悪を伴うものであるから、武力を行使した時点で、敵をも愛するという「基督者の道」を踏み外してしまうからである。そして、このような態度こそが「権能に服し国法を重んじて死に就き、われを殺す敵のために祈るの大精神を発揮したるナザレのイエス」[59]の態度であり、我々もそれに倣わなければならないと内村は言うのである。

ここから、内村は、「斯かる場合の甚だ稀」であるとはいえ、「特別の場合」において、国家に対する国民の抵抗を想定していることがわかる。つまり、国家について、それが取るべき道を間違いうる可能性のあるものだと見做しているのである。そして、国家に対してそのような可能性を認めていたからこそ、国家に迎合するような愛国心もまた、同様に間違いうる可能性を持つものであると考えたのであろう。だからこそ、内村は、当時一般の愛国心に迎合せず、戦争協力の道へと進まなかったのではないだろうか。

5．結論

以上行ってきた考察を通して、本稿では、内村が、国家主義に呑まれなかった理由を愛国心の観点から考察し、その理由として、次の二つが挙げられることを明らかにした。一つは、内村の愛国心と、その愛の概念であり、もう一つは、それらを基盤として形成された、国家に対する内村の姿勢である。まず、内村の愛国心においては、キリスト者はイエスの愛国心に倣わなければならないため、国外よりも国内に目を向け、義のために「内敵を憎」むべきもの、つまり、日本に対してこそ義憤を抱かなければならないものであった。そして、そのような愛国心の根本を構成する愛の概念は、愛国心と同様にイエスを模範として愛と義の同時性、不可分性を述べ、愛の

(52)　同上、404 頁。
(53)　同上、404 頁。
(54)　同上、405 頁。
(55)　同上、405 頁。
(56)　同上、405 頁。
(57)　同上、405 頁。
(58)　同上、405 頁。
(59)　同上、407 頁。

対象にこそ義憤を抱かなければならないとしており、愛国心の論理と深く関連していた。さらに、内村は、そのような愛国心と愛の概念を基盤として、国家に対する姿勢を形成した。その結果、内村は、国家を取るべき道を間違いうる可能性のあるものだと考え、国家に迎合するような当時一般の愛国心に迎合しなかったと言えるであろう。

現代に生きる我々は、愛国心という言葉を聞くと、そこから、「戦争」「軍国主義」「国粋主義」「全体主義」といった言葉を連想しがちであり、愛国心という言葉に対して、どこか身構えてしまう節があるのではないだろうか。確かに、愛国心とそれらとの親和性は高いことは、これまでの歴史が証明するように、事実である。いわゆる「愛国者」の大多数が、それらを礼賛かつ推進し、その中に身を投じていった。

しかし、内村の愛国心のように、それらとの親和性を持たない愛国心が存在することも、また事実である。そのような愛国心は圧倒的少数派であったが、確かに存在した。内村の愛国心とは、国家に無条件に迎合するのではなく、ただ自国を愛し、それに対する自分の関わり方を考え、より良い国家にするための思想や理論、方法を模索する意欲であった。そして、これこそが、昨今の我々が模索している “patriotism” そのものではないだろうか。

参考文献

『内村鑑三全集』全 40 巻、岩波書店、1980-1984 年。
『内村鑑三日記書簡全集』全 8 巻、山本泰次郎編、教文館、1964-1965 年。
『内村鑑三英文論説翻訳篇』上、亀井俊介訳、岩波書店、1984 年。
『内村鑑三英文論説翻訳篇』下、道家弘一郎訳、岩波書店、1985 年。
内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』、鈴木俊郎訳、岩波書店、2006 年第 70 版。

鈴木範久「内村鑑三における人間苦の問題―その苦難観の変遷をたどって―」『宗教研究』第 36 巻第 1 輯、日本宗教学会、1962 年、93 ～ 112 頁。

アグネシカ・コズィラ『日本と西洋における内村鑑三――その宗教思想の普遍性』教文館、2001 年。
磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜――宗教・国家・神道』岩波書店、2003 年。
江端公典『内村鑑三とその系譜』日本経済評論社、2006 年。
斎藤宗次郎『花巻非戦論事件における内村鑑三先生の教訓』クリスチャン・ホーム社、1957 年。
鈴木範久『内村鑑三』岩波書店、1984 年。
鈴木範久『明治宗教思潮の研究――宗教学事始』東大出版会、1979 年。
武田清子『峻烈なる洞察と寛容　内村鑑三をめぐって』教文館、1995 年。
土肥昭夫『内村鑑三』日本基督教団出版部、1962 年。
富岡幸一郎『内村鑑三』五月書房、2001 年。
富岡幸一郎『非戦論』NTT 出版株式会社、2004 年。
松沢弘陽責任編集『内村鑑三』中央公論社、1971 年。
森有正『内村鑑三』講談社学術文庫、1976 年。
山本泰次郎『内村鑑三の根本問題』教文館、1968 年。

（きくかわ・みよこ　同志社大学大学院神学研究科博士前期課程）